右京三条一坊八坪の調査

―第448次

1　はじめに

本調査地は、(株)積水化学奈良工場内に付設されているグラウンド内にあたり、当該地に平城京遷都1300年祭にともなう平城京歴史館（仮称）が建設されることになったため、その事前調査としておこなわれたものである。調査面積は1100㎡で、調査期間は平成21年１月６日から３月23日である。

2　調査成果

まず、グラウンドの盛土と旧耕作土を除去したところ、調査区中央において護岸杭列をともなう池の痕跡を検出した。また、池の中からは大量の建築廃材とともに、看板や薬莢などの米軍に関連する遺物が出土した。

この池は、1929年に当該地に設けられた奈良地方競馬場に関連する施設である可能性が高い。奈良地方競馬場は1940年に秋篠町（現在の奈良競輪場）に移設され、その後、太平洋戦争中には興亜機械工業なる軍需工場が建設される。そして終戦後、軍需工場を米軍が接収し、当該地にグラウンドを敷設する。したがって、この池から出土した廃材は興亜機械工業の建築廃材と考えられ、基地施設を造営した米軍によって投棄されたのであろう。

なお、この池はさらに西側に広がっていた昭和以降の大きな池を一部埋め立てて造られている。

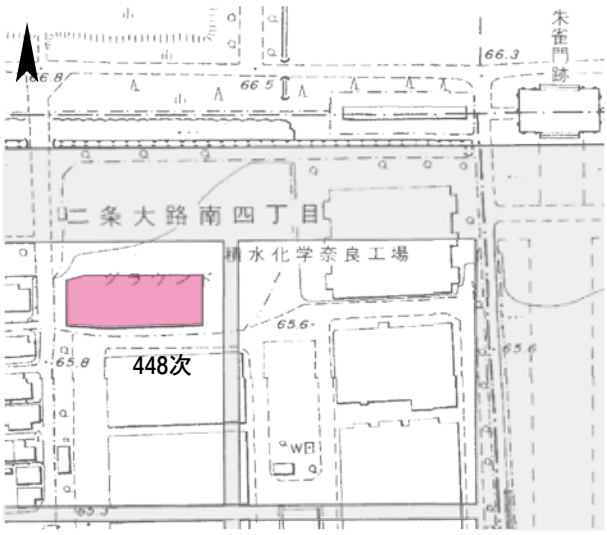

図 204　第 448 次調査区位置図　1：3000

したがって、調査区内で検出された奈良時代の遺構面は、調査区東側と北側にわずかに残されている状況であった。

調査区東側では、南北15m、東西５mにわたるＬ字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出した。Ｌ字状の溝の内外では整地の状況が異なり、内側では瓦を含む整地土が確認された。また、溝の内側では柱穴などの遺構は検出されなかった。さらに、当初はこの溝が建物にともなう雨落溝ではないかと想定していたが、溝の形状が比較的不整形で、底の形状も凹凸が激しいことから、雨落溝とみなすことは適当でないことが明らかとなった。以上のことから、溝は基壇外装の抜取痕であり、溝の内側の整地土が建物基壇の積土に相当すると考えられる。現状では基壇も大きく削平されているため、柱穴などの痕跡は存在しないのであろう。

調査区北側においても、東西20m以上にわたって瓦溜まりが検出された。調査区東側の瓦溜まりに比べると土器の出土量が多く、両者に差異が認められる。瓦溜まりの下層からは何ら遺構は検出されなかったが、瓦溜まりの範囲から想定すると、調査区北側に何らかの建物の存在が想定される。

以上の箇所で出土した瓦の年代から、今回検出した遺構面は奈良時代後半のものと考えられる。そこで、その下層に存在するであろう奈良時代前半の遺構面について調査したが、下層からは地山となる砂層が検出されるにとどまり、顕著な遺構面は確認できなかった。したがって、当該地における奈良時代前半の状況については不明と言わざるを得ない。

なお、池の底からは弥生～古墳時代の流路が確認されている。

3　出土遺物

主要な遺物としては瓦と土器がある。そのうち、軒丸瓦に6136Ｂ・Ｓ型式が認められ、6136Ｓ型式は奈良山丘陵の瀬後谷瓦窯産である。

また、土器には奈良三彩の碗などもある。時期は概ね奈良時代末～平安時代初頭にあたる。おそらくは平城京の廃絶時のものと考えられる。この他、奈良時代後半の長胴甕がほぼ完形で出土している。　（林　正憲）

図 205　第 448 次調査区全景（西から）

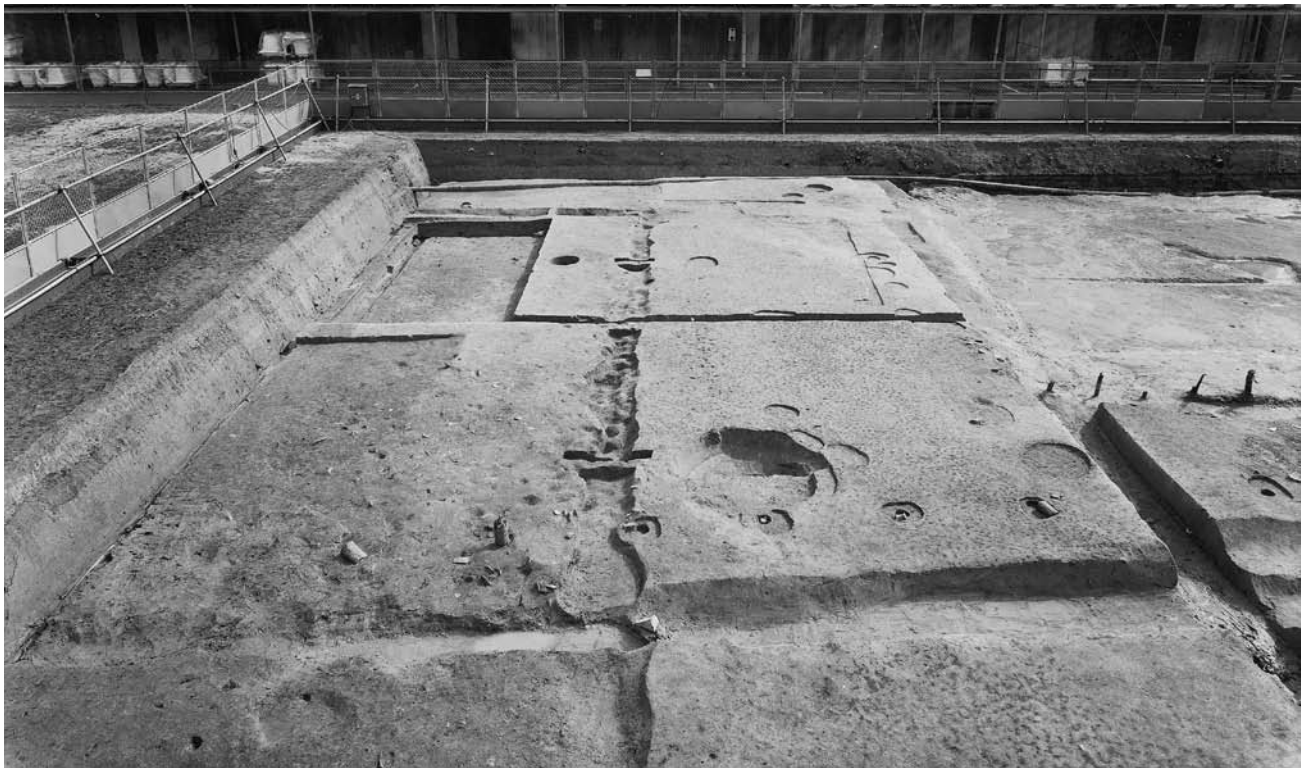

図 206　調査区東側で検出したＬ字状の溝（北から）